

**表5 日本の高校生における親評定SDQの平均得点 (標準偏差): 学校種別、男女別**

**全日制**

	全体 (N=1418)	男児 (N=871)	女児 (N=547)
総合的困難さ TDS	6.8 (4.6)	7.3 (4.8)	6.1 (4.1)
情緒の問題	1.3 (1.8)	1.2 (1.7)	1.5 (2.0)
行為の問題	1.4 (1.4)	1.6 (1.5)	1.2 (1.2)
多動・不注意	2.3 (1.9)	2.6 (2.0)	1.8 (1.6)
仲間関係の問題	1.8 (1.6)	2.0 (1.8)	1.5 (1.4)
向社会的な行動	6.2 (2.2)	5.9 (2.3)	6.6 (2.1)

学年による平均得点の差は、向社会的な行動を除く困難さについては、有意ではなかった。向社会的な行動は、3年生では1年生、2年生よりも有意に得点が高かった（より向社会的であることを意味する）( $p < .05$ )。

性による違いは、困難さの尺度では、情緒の問題では女児が男児よりも有意に問題が多かったが( $p < .01$ )、それ以外の下位尺度および総合的困難さでは男児の方が有意に困難さが大きかった( $p < .001$ )。向社会的な行動尺度では、女児の方が男児よりも高かった( $p < .001$ )。

**定時制**

	全体 (N=130)	男児 (N=76)	女児 (N=54)
総合的困難さ TDS	10.6 (6.1)	10.2 (6.0)	11.2 (6.5)
情緒の問題	2.3 (2.3)	1.8 (1.9)	3.0 (2.7)
行為の問題	2.0 (1.7)	2.0 (1.6)	2.0 (1.8)
多動・不注意	3.3 (2.3)	3.4 (2.3)	3.1 (2.4)
仲間関係の問題	3.1 (2.2)	3.0 (2.3)	3.1 (2.0)
向社会的な行動	6.2 (2.2)	5.9 (2.2)	6.6 (2.2)

学年による平均得点の差は有意ではなかった。

性による違いは、情緒の問題では女児が男児よりも有意に問題が多かったが( $p < .01$ )、それ以外の下位尺度および総合的な困難さでは男女で有意差はなかった。

学校種別の比較では、総合的困難さ、行為の問題、多動・不注意、仲間関係の問題は、定時制生徒の方が有意に全日制生徒よりも高かった( $p < .001$ )。総合的困難さは学校種別と性の交互作用が有意で( $p < .05$ )、全日制では男児が女児よりも困難度が高かったが( $p < .001$ )、定時制では男女で有意差はなかった。また、情緒の問題も学校種別と性の交互作用が有意で( $p < .05$ )、定時制での男女差は全日制での男女差よりも大きい、すなわち定時制女子生徒の情緒の問題は高かった。向社会的な行動は学校種別に有意差はなかった。